

分離不安を示す幼児に対する音楽療法

学校教育専攻
生徒指導コース
立本 千寿子

指導教官 田中 雄三

1.背景と目的

音楽療法は、現在日々発展している分野であり、様々な領域で用いられている。長い歴史の中で、音楽は、医療的な治療という観点からみられてきた歴史を持ち、癒す力を持っている。近年では、自閉症児、医療現場（総合病院・小児科病棟・ホスピスなど）、老人施設、身体障害児、知的障害児、学習障害児などの対象を中心として、音楽療法がなされている。

人間の成長過程において、幼児は、日々の生活の中で、様々なものを見、感じ、発達・成長していく。その中でも、音楽というものは子どもの情緒を養い、豊かな心をはぐくむ力を持っている。言語能力が大人に比べて発達していない幼児にとって、音楽は非言語的なものであるだけに子どもたちの感情に投げかけやすく、また表現しやすいものであると思われる。これらの点からも、幼児の発達・成長に対する音楽療法は、とても有効であると思われるのである。

これまでの研究で、音楽療法が不安に対して効果があるということが明らかにされている。それらの研究をふまえて、本研究では、分離不安を示す幼児に対して、音楽が力を与え、不安を軽減させることができるかどうかを事例的に検討する。

2.対象と方法

(1) 対象

本研究では、A県X保育所3歳児21名（男児12名、女児9名）と、同県Y保育所3歳児41名（男児23名、女児18名）を研究の対象とした。

その中で、保育士による質問紙において、分離不安傾向が強いとされた幼児6名（男児2名、女児4名）を抽出し、音楽療法の対象とした。その内訳は以下の通りである。

X 保育所

A子	3歳児	継続児
B子	3歳児	継続児
C子	3歳時	新入所児

Y 保育所

D子	3歳児	継続児
E男	3歳児	継続児
F男	3歳児	継続児

(2) 方法

1. 質問紙による調査

①分離不安傾向質問紙

幼児たちの分離不安傾向をみるために、X保育所、Y保育所の3歳児を受け持つ保育士に実施した。質問紙は10項目からなり、回答は「よくあてはまる」「ややあてはまる」「全くあてはまらない」の3件法で、「よくあてはまる」に2点、「ややあてはまる」に1点、「全くあてはまらない」に0点を与えて採点した。質問紙は、音楽療法セッション実施前と実施後の2回行った。

②対象児に関する調査

上記の質問紙によって分離不安傾向が高いとされた子どもたち6名に対し、保育士にそれぞれの幼児について詳しく教えて頂いた。

2. 音楽療法セッションの実施

各保育所において、大きく2つのタームに分けて実施した。第1タームでは、各保育所とも週2回ずつ実施し、各保育所で8回実施した。また、第2タームでは、各保育所とも週1回ずつ実施し、各保育所で4回実施した。このようにして、各保育所12回ずつ、計24回のセッションを実施した。セッションを進める過程において、1人1人の幼児たちの様子を見ながら、子どもたちが必要としているものを、音楽を通して与えることが出来るようなセッション内容を考案していくことに努めた。

3. 結果

1. 分離不安傾向質問紙の結果

セッション実施前と実施後の2回、質問紙を行ったが、幼児全員の分離不安は軽減されたという結果が出た。分離不安得点の結果は以下の通りである。

X保育所

	A子	B子	C子
実施前	10	12	16
実施後	2	1	1

Y保育所

	D子	E男	F男
実施前	8	9	10
実施後	0	1	0

2. 保育士の方の事後調査の結果

保育士にして頂いた調査からも、6名の幼児たちが、今回の音楽療法セッションによって、

成長したという点を指摘され、プラスの力が働いたという評価を得た。しかし、その子どもたちの成長が、〈音楽療法によってなされたものなのか、それとも、子どもたちの持っている成長する力によって変化していったのかははっきりとは分からない。〉という点を御指摘された。また、分離不安の改善によって成長したところを教えてください。という質問をした結果、〈X保育所のA子は、朝、母親と離れる時は泣かないようになった。割合すんなりと別れることが出来るようになった。B子は、母親に何か言う前から別れるが、激しく抵抗を示したり泣くということはなくなった。好きな遊びなどを見つけて保育生活に入っていけるようになった。C子は、泣きはせずに母親から離れるようになった。〉というお言葉を頂いた。

4. 考察

今回の研究で、音楽療法が分離不安を示す幼児に対して効果があり、彼らの抱く分離不安を軽減させるということが分かった。幼児たちが音楽を通して“楽しい”と感じる時間を持つことで、寂しさや不安などの感情を忘れていくことが出来、保育所での生活を安定して過ごせるようになっていったと思われる。今回の音楽療法セッションにおいて、子どもたちが音楽を通した様々な活動の中で、自分を思うままに表現すること、その子どもたち1人1人の表現を筆者や補助者（ピアニスト）がしっかりと受け止めることによって、子どもたちが“みんなと一緒に、一緒に楽しい”と思うことの出来る時間を過ごすことが、子どもたちの情緒の安定にプラスの力を与えることができたのではないかとと思われるのである。